Revolution Disappeared into the Desert (2)

——Discovering the Revolution of Bedouins in Modern Egypt——

by Hiroshi KATO

At the beginning of the reign of Sa'id (ruled 1854-63), a large scaled revolt of bedouins against the state broke out. It was led by 'Omar Masri, shaykh of Jawazi tribe. Jawazi is a tribe which migrated from the Cyrenaica district of east Libya to Minya and Fayyum Provinces of Egypt at the beginning of 19th century. 'Omar Masri, leader of this rebellion, was influential in Minya Province as a settled, big landowner.

This rebellion was so big trouble to Egyptian government of the time that 'Omar Masri was called "*shaqī*" (wretched) and was sought as a criminal in official documents during the reign of Sa'id. But, he managed to hide in the Cyrenaica district of east Libya, after successfully eluding pursuit in the oasis regions in the western desert. He stayed there until the accessing of Isma'il (ruled 1863-79), the successor to Sa'id, who proposed reconsiliation between the two.

This rebellion was the turning point in the history of Bedouins with regard to their relationship to the Egyptian state. After it, no big revolt was caused by Bedouins. However, it is very curious that the rebellion of 'Omar Masri has been the forgotten and ignored revolt in history, although it was the biggest revolt by Bedouins against the state in 19 century in Egypt. My previous essay was written to answer the question why the rebellion of 'Omar Masri has been forgotten.

Anyway, although the uprising and its leader were called rebellion and "*shaqī*" (wretched) respectively in the official documents, the uprising concerned was a lawful objection against the state and its leader, 'Omar Masri, was a hero for the offspring of 'Omar Masri. They call the uprising

of 'Omar Masri a “revolution”. Masri Kilani, one of grandsons of 'Omar Masri, is the most active and intellectural member of the offspring who make efforts to recover the legitimacy of the uprising of 'Omar Masri.

I met him at the early stage of my research on the forgotten revolution of Bedouins in Modern Egypt, and since the first meeting, he has been the excellent informant for my research. Regretfully, he passed away in November of 2006. This is the second essay which is titled “Revolution Disappeared into the Desert”, and its purpose is to introduce the career and the works of Masri Kilani who try to discover the rebellion led by his grandfather.

砂漠に消えた「革命」（2）

――掘り起こされる近代エジプトの遊牧民「革命」――

加藤　博

はじめに　掘り起こされる「革命」
1　マスリー・キーラーニーとの出会い
2　人物マスリー・キーラーニー
2―1　マスリー・キーラーニーの履歴
2―2　研究者マスリー・キーラーニー
3　「革命」論文の翻訳
3―1　マスリー・キーラーニー・マスリー著「オマル・マスリー革命」
3―2　「革命」論文注釈
むすびにかえて
注

参考文献
付録「オマルの館」

われわれの間に意見の相違を認めません。あなたがこの「革命」を「反乱」と呼ぶことを除いては。

（一九九三年五月二日付　加藤博宛、マスリー・キーラーニー・マスリー書簡）

歴史家たちは、この革命をオマル・マスリー革命と呼ぶことに同意した。しかし、この革命については、いまだそれに見合った十分な注意が向けられておらず、必要な研究もなされていない。

（マスリー・キーラーニー・マスリー著「オマル・マスリー革命」から）

はじめに　掘り起こされる「革命」

一九世紀の中葉、サイード統治（一八五四―六三）下のエジプトにおいて、遊牧民が蜂起した。その指導者は、ジャワーズィー族の首長（シェイフ）、オマル・マスリーであった。この蜂起は当時のエジプト政府を慌てさせ、時の権力者サイードは正規軍を派遣してその鎮圧にあたった。

しかし、蜂起の指導者オマル・マスリーは正規軍の派遣を知るや、故郷ミニヤを後に、西部（リビア）砂漠へと逃れた。サイードは彼を追跡すべく、諜報員を放ち、彼の存在が確認されたときには、軍隊を差し向けた。

ところが、オマル・マスリーは神出鬼没、砂漠のオアシスを転々とし、結局、当局の手にかからず、ジャワーズィー族の故郷、リビアの東部、キレナイカ地方―アラビア語でバルカ―に逃げおおせた。そして、サイードが死に、新たなエジプト統治者イスマイール（統治一八六三―七九）が彼の帰国を許すまで、そこに留まった。

この蜂起は公文書のなかでは「反乱」と呼ばれ、その指導者オマル・マスリーは逃亡生活の間、「お尋ね者」として全国に手配された。しかし、蜂起をした当事者とその子孫たちにとって、この蜂起は政府の不正をただす「革命」であり、指導者オマル・マスリーは「英雄」であった。

このように、この蜂起は一方で「反乱」と、他方で「革命」と呼ばれたが、それがどう呼ばれようと、この蜂起が実際に起き、時の政府を慌てさせた大きな事件であったことに変わりはない。ところが、現在、エジプトでこの事件を知るのは、ほんの一握りの人間でしかない。つまり、この蜂起は歴史の流れのなかで忘れ去られた事件なのである。(1)

しかし、この事件を歴史の忘却から蘇らせ、掘り起こすことに熱意を燃やす人物がいる。オマル・マスリーの子孫たちである。私が知る限り、それは三人であり、マスリー・キーラーニー、その従兄ハーリド・アブデルカウィー、その甥ターハー・キーラーニーである（ハーリド・アブデルカウィー、ターハー・キーラーニーについては、それぞれ加藤 1993:16、加藤 1997a:62を参照）。

とりわけ、マスリー・キーラーニーのこの事件を掘り起こそうとする熱意には、圧倒されるものがある。それは、かれが「革命」の指導者オマル・マスリーの曾孫だというだけでなく―オマル・マスリーの曾孫だというのならば、ハーリド・アブデルカウィーも同じである―、後述する出自・経歴からくる、かれの自意識と問題関心の強さ、そしてかれの資質と能力のためであろう。かれは、生涯をかけて、「革命」の正当性を主張し、そのエジプト史における

復権をはかろうとした。

私はかれを、この「革命」について研究を始めた早い時期に知る幸運に恵まれた。かれは、自身が「革命」の研究者であるとともに、「革命」の指導者の末裔として、私の「革命」研究にたいする情報提供者でもあった。私の「革命」研究は、かれの存在抜きには語れない。本稿は、この研究者でもあり情報提供者でもあるマスリー・キーラーニーによって掘り起こされた「革命」を紹介することを目的とする。(2)

1　マスリー・キーラーニーとの出会い

一九九二年一月の中旬、大学の私のメールボックスにエジプトからひとつの封書が舞い込んだ。差出人の名はマスリー・キーラーニー・マスリーであった。私にはこの名前に見覚えがなかった。開封し、読みだして、驚いた。そこには、簡単な自己紹介の文章の後、次のような文章が書かれていたからである。

私はあなたに、私が指導者オマル・マスリーの孫（a grandson）であることを伝えるために書いている。あなたは、かれの歴史を調べるため、エジプト・アラブ共和国ミニヤにある、「オマル・マスリーの館」と呼ばれているかれの故郷を訪れたであろう。

それはオマル・マスリーの孫からの手紙であった。もっとも、実際には、後でわかったことであるが、かれはオマ

ル・マスリーの曾孫であった。手紙のなかで孫と書かれていたのは、エジプト人は通常の会話のなかで曾孫と孫を厳密には区別しないからである。

私はこの手紙を受け取る前、一九九一年九月一六日の夜九時から一〇時にかけて、オマル・マスリーが眠る、リビア砂漠を背後にひかえたミニヤ県サマルート郡「オマルの館」を訪問し（加藤 1993）、蝋燭とランプの下で聞き取り調査をした。そして、帰る際、オマル・マスリーの蜂起に関する英文の拙稿（Kato 1990）を置いてきた。現在でこそ、そのようなことはないが、なんと、当時、「オマルの館」には、電気が通っておらず、少々気味の悪い訪問であった。

かれはこの事実を、従兄で「オマルの館」の主人、ハーリド・アブデルカウィー・マスリーから聞き、置いてきた拙稿に目を通した。手紙の日付は、一九九一年一二月二四日であった。これが、私とマスリー・キーラーニーとの出会いであった。この手紙は、私にとって全くの驚きであり、喜びであったが、その内容は、私を少々、当惑させるものでもあった。というのも、そこには、以下のような文章が続いていたからである。

「オマル・マスリーの館」で、あなたは私の従兄、シェイフ（年長者に対する敬称）・ハーリド・アブデルカウィー・マスリーと会ったであろう。そのかれが私に、あなたの名前と住所を教えてくれた。かれの言うところによれば、あなたはわれわれの共通の祖父、オマル・マスリーの歴史について語り、このテーマで本を書くという。

ともかく、われわれ（私とマスリー・キーラーニー）はともに、オマル・マスリーの真実のそして名誉ある歴史を紹介することに興味を抱いている。私の従兄、シェイフ・ハーリドは歴史の専門家ではない。そのため、かれがあな

たに語ったことから、十分な事実を引き出すことは出来ないであろうし、かれがあなたに与えた情報は修正する必要があろう。さらに、あなたがこれまでに入手していない、詳細で重要な情報がある。わたしは、オマル・マスリーの歴史と情報について、あなたにより多くの事実を与えるために、都合のつくときに、あなたに会いたいと思っている。と同時に、会見し、私があなたにすべての、そして真実のオマル・マスリーの歴史を与える前に、いかなる本であろうと、このテーマについて出版することを控えてもらいたい。

ここには、マスリー・キーラーニーの驚きと自負がストレートに示されている。驚きとは、エジプトから遠く離れた日本の研究者がはるか昔の自分の祖父の「革命」に興味をもち、研究していることに対する驚きである。かれは何度も、自分が書いた「革命」についての文章をエジプトの新聞や雑誌に投稿した。しかし、それらはすべて受理されなかった。少なくとも現在のエジプト人にとって、マイナーな遊牧民の蜂起を扱っており、相手にされなかったのである。ところが、そのテーマについて、日本人が関心を持ち、「革命」の主人公が住んだ館にまで足を運んだのを知ったのである。

自負とは、文字通り、自分以上に「革命」について詳しい者はいないとの確信である。かれは、後に詳しく紹介するように、若いときから「革命」に強い関心を抱き、大げさに言えば、生涯を通して、「革命」の情報を集めるために、できる限りのことをしてきた。実際に、かれは父を始めとした親族から聞き取りをし、伝承や文献を渉猟し、図書館や公文書館にも足を運んだ。

ともかく、かくして、手紙での最初の出会いからおよそ一年半後の一九九三年七月一日、私はマスリー・キーラー

ニーと初めて会見した。実は、私はその三ヶ月前の四月から、日本学術振興会カイロ研究連絡センターに赴任していた。そのため、もっと早くかれと会うこともできたのだが、先の手紙の内容から、気後れして、すぐに会いに行かなかったのである。

会見は、カイロの郊外、マアーディー地区のはずれ、砂漠の見える新興住宅街のかれのフラットにおいてであった。そのとき、かれが述べた、砂漠に面しているからこのフラットを選んだ、という言葉が印象に残っている。

その後、日本学術振興会カイロ研究連絡センターの仕事を終え、一九九四年四月、日本に帰国するまで、私は頻繁にマスリー・キーラーニーと会った。その回数は、二〇回にものぼっている。[3] そのほとんどが、マスリー・キーラーニー宅においてであったが、日本学術振興会カイロ研究連絡センターやカイロ市内の日本料理店のときもあった。カイロ赴任の後半には家族が合流したため、付き合いは家族ぐるみとなり、多くのマスリー親族とも引き合わされた。

その後、日本へ帰国後も、年に一回か二回、エジプトを訪ねるたびに、マスリー・キーラーニー宅にお邪魔し、意見の交換をした。そして、そのたびに、「お前の本はいつ出るのか」と催促された。その間、私が少なくとも、悪さをする人間ではないと判断したからであろう、かれは、話が展開するに応じての小出し、小出しの情報提供であったが、それまでに収集した関連情報を惜しみなく与えてくれた。

かれはやや肌黒く、痩躯であり、少々神経質そうにみえたが、精悍であった。子供がいなかったこともあってか、目に障害をもつ、やさしく、料理の上手な奥さんと仲むつまじく生活していた。狭いベランダのような書斎で、朝早く、新聞を読むのを日課としていた。正真正銘の「紳士」であった。そのかれに、ここ数年、エジプトには毎年調査に出向いていたものの、挨拶に行っていなかった。忙しさにかまけて、「革命」研究を疎かにして、かれに会わせる

顔がなかったからである。そのようななか、二〇〇六年の一一月、かれは亡くなった。

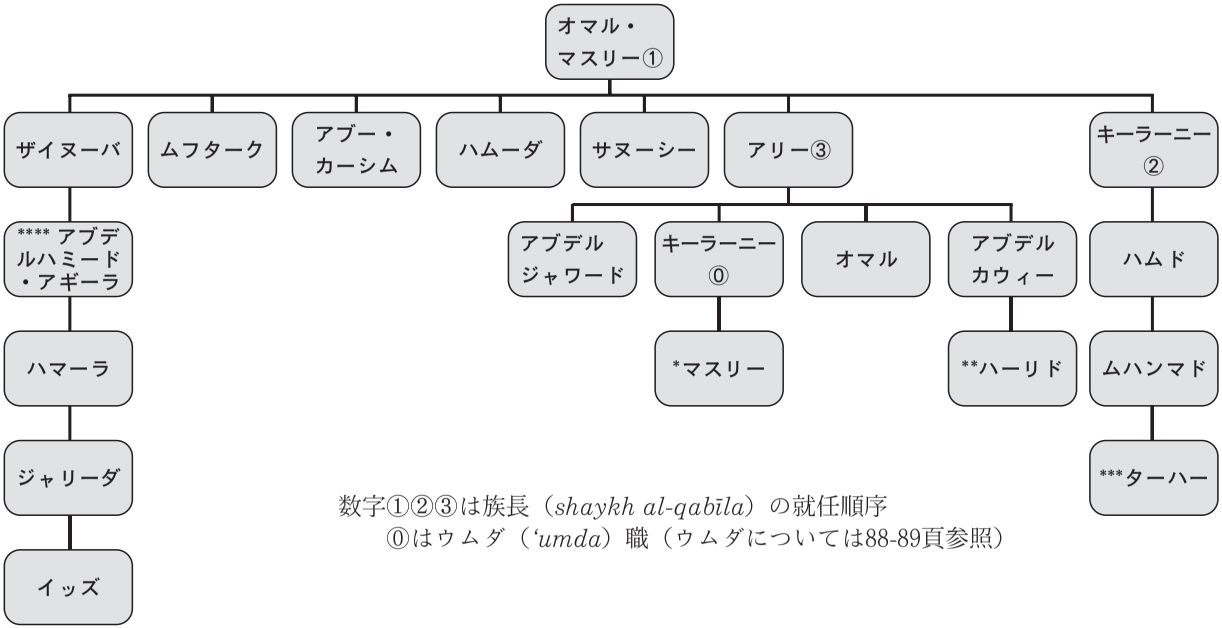
かれは本当に、私の研究が出版されるのを楽しみにしていた。エジプト人ではない日本人が、「革命」を扱うことをとりわけ喜んでいた。それは、利害関係に巻き込まれず、自由に書けるからという理由もあったが、手前勝手に判断すれば、遠いアジアの国の研究者が「革命」を扱うことによって、「革命」の客観的意義が証明されたように思われたからに違いない。私の出現を、「贈り物」と表現したこともあった。

要求もしないのに、私が英語で本を出版したら、それを自分がアラビア語に翻訳すると申し出てくれた。そして、そのためにといって、早々とアラビア語版の序文まで書いてくれた。それが、思いもかけず、二〇〇七年の三月、エジプトに滞在中、かれの訃報に接することになった。歳は七十才を越えていたが、見た目には元気そうであった。二〇〇七年に入って、私も歳だし、ここ数年の不義理に終止符を打ち、そろそろ挨拶に行こうかと考えていた。その矢先の訃報であった。痛恨の極みである。

2　人物マスリー・キーラーニー

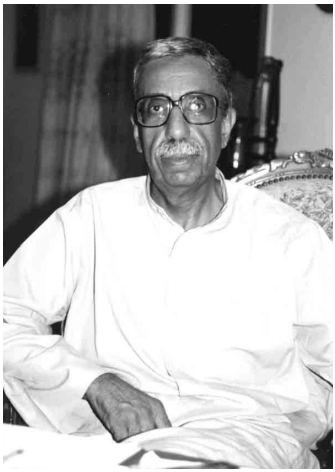
2―1　マスリー・キーラーニーの履歴

マスリー・キーラーニーの正式名（al-ism al-ḥaqīqī bi-l-kāmil）は、マスリー・キーラーニー・アリー・オマル・マスリー、出生地はミニヤ市、生年月日は一九三〇年二月一八日である。カリュービーヤ県の村出身の教養ある（muthaqqafa）―ここでは「教養ある」と訳したが、muthaqqafa というアラビア語は、「読み書きできる」という



図版１　マスリー・キーラーニー一族の系図

*本人　　**ハーリド・アブデルカウィー　　***ターハー・キーラーニー
****アブデルハミード・アギーラ（1970年前後に死去。マスリー・キーラーニーの情報源であり、後に述べるオマル・マスリー「革命」物語の生みの親である。本文92頁参照）



図版２　マスリー・キーラーニー

図版３　ハーリド・アブデルカウィー

意味で使われているように思われる―エジプト人女性と結婚したが、子供はいない。以下は、マスリー・キーラーニー本人から直接聞いた情報に基づく、かれの履歴の概略である。

系図（図版１）にあるように、かれは、オマル・マスリーの息子の一人、アリーの孫として生まれた。祖父アリーには四人の息子がおり、その一人、キーラーニーがかれの父である。一九六三年に死んだ父キーラーニーはジャワーズィー族のウムダ（本来の意味は「代表」、エジプト近代史のうえでは「村長」、遊牧民の部族制との関係におけるこの役職については、八八―八九頁参照）であり、農地を所有していた。

かれの母は、ダカフリーヤ県の村出身の教養ある（muthaqqafa）エジプト人である。かの女は、スーダンのワード・マダニー市に生まれた。当時、かの女の父は、そこでエジプト軍の将校を勤めていた。一九四七年に死去した。

父キーラーニーの四人の兄弟の長男はアブデルカウィーであるが、かれはほかの兄弟とは大きく歳が離れていた。おそらく、母親が違っていたのであろう。この長男アブデルカウィーの息子が、「オマル

の館」の主人、ハーリド・アブデルカウィーである。遊牧民の系図に関するイブン・ハルドゥーン（一三三二―一四〇六）の古典（*kitāb al-ʻibar wa dīwān al-mubtadaʼ wa al-khabar fī ayyām al-ʻarab*）を参照しながら、自分の一族の系図を手書きで作っていた姿が、今でも目に浮かぶ。一九九四年当時において、六十六歳であった。二〇〇二年に亡くなった。

マスリー・キーラーニーはミニヤで、一九四一年に初等教育（al-ibtidāʼīya）を、一九四六年に中高等教育（al-thānawīya al-ʻāmma (al-tawjīhīya)）を終えた。その後、カイロ大学（当時は、フォワード1世大学）の法学部で学び、一九五一年に同学部を卒業し、法学士を取得した。

大学卒業後、一九六一年まで、所有地での農業に従事するかたわら、民間部門でのあまり重要でない法律関係の仕事を行った。五〇年代において、エジプト政府はマスリー・キーラーニーを、かれの農場があるマズルーク村のウムダ（村長）に任命したが、本人によれば、かれはその受け入れを断った。また、かれは自分の名前を弁護士組合名簿に登録したが、実際に、裁判に立ち会ったことはない。一九六二年、マスリー・キーラーニーは配給・国内商業省に職を得た。そのポストは、カイロ県の配給・国内商業部門における法律問題局長代行であった。

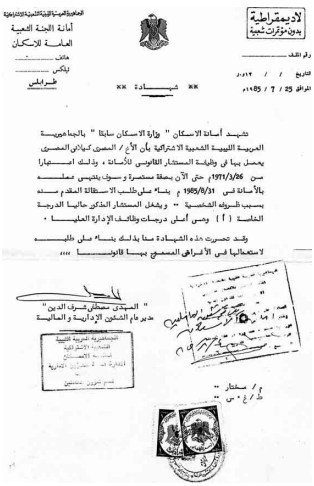
一九七一年、かれは経歴のうえで一大転機を迎えることになる。職を得て、リビアに赴任することになったのである。その経緯は、かれ自身の文章で示すと、以下のようなものであった。

この年、（マスリー・キーラーニーの）友人、ナキーブ（神秘主義教団（タリーカ）の指導者であることを示す称号）故ムハンマド・マクリーフから、個人的に、リビア政府のもとで働かないかと誘われた。故ムハンマド・

マクリーフは、リビア革命評議会（majlis qiyādat al-thawra al-lībiya）のメンバーであり、住宅供給省大臣であった。かれは、ジャワーズィー族が所属しているジャバーリナ部族集団の一つ、マガーリバ族の一員でもあった。故ムハンマド・マクリーフによると、エジプト供給省は、何ヶ月も、マスリー・キーラーニーの委嘱を拒否しつづけた。そこで、故ムハンマド・マクリーフはトリポリのエジプト大使に会い、直ちに無線でエジプト大統領府に連絡し、マスリー・キーラーニーへの委嘱の許可状を発行してもらいたい旨のかれの個人的な願いを伝えるよう頼んだ。かくて、その日のうちに、大統領、故アヌワル・サダトによって、（委嘱の）許可状が発行され、それに関する通達が、供給省に送られた。

こうして、マスリー・キーラーニーは、一九七一年から一九八五年末までの期間、リビアの住宅供給省の法律顧問として、また、リビアの住宅供給省に所属するいくつかの組織や機関の法律顧問として働いた。かれが私に見せてくれた一九八五年七月二五日付のリビア滞在証明書には、次のように記されている。（図版4）

リビア・アラブ社会主義人民合衆国の住宅信託局（旧住宅省）は、兄弟マスリー・キーラーニー・マスリーが住宅信託局の法律顧問として働いていることを証明する。その期


الجماهيرية العربية الليبية الشعبية الاشتراكية
أمانة اللجنة الشعبية العامة للإسكان
هاتف
تلكس
طرابلس

لا ديمقراطية بدون مؤتمرات شعبية

رقم الملف
التاريخ / / ٢٠٠٢م
الموافق 25 / 7 / 1985م

** شهادة **

تشهد أمانة الاسكان " وزارة الاسكان سابقا " بالجماهيرية العربية الليبية الشعبية الاشتراكية بأن الأ/ المصري كيلاني المصري يعمل بها في وظيفة المستشار القانوني للأمانة ، وذلك اعتبارا من 1971/3/26م حتى الآن بعقد مستمر و سوف ينتهي عمله بالأمانة في 1985/8/31 م بناء على طلب الاستقالة المقدم منه بسبب الظروف الشخصية .. ويحمل المستشار المذكور حاليا الدرجة الخاصة (أ) وهي أعلى درجات وظائف الإدارة العليا .

وقد تحررت هذه الشهادة منا بذلك بناء على طلبه لاستعمالها في الأغراض المعني بها قانونا ....

" المهدي مصطفى شرف الدين "
مدير عام الشئون الإدارية والمالية

الجماهيرية العربية الليبية
الشعبية الاشتراكية
أمانة الاسكان
الشئون القانونية
الملف
التاريخ
الموافق
صح طبق الأصل

مستشار
ط/ ع/ س

図版４　リビア滞在証明書のコピー

間は、継続して、一九七一年三月二六日から現在までであり、この住宅信託局での職務は、一九八五年八月三一日に終了する。これは、個人的事情を理由にかれが提出した退職要請によるものである。…当該顧問は、現在、特別一級職についている。それは、上級行政職で最も高い職級である。

一九八五年、マスリー・キーラーニーは、リビア政府とエジプト政府の職を辞し、エジプトにもどった。その後は、二〇〇六年一一月に死去するまで、悠々自適の自由な生活を送った。

以上が、マスリー・キーラーニーの経歴の概略である。私がかれに初めて会ったのは、すでに指摘したように、一九九三年の七月であった。かれがリビアからエジプトに戻って、およそ八年後である。すでに、新しい生活の拠点として、カイロ郊外のマアーディー地区に新しいフラットも購入していた。

出会ったときの印象は、本人が述べたように、ゆったりと、自分の生活を楽しんでいるようにみえた。会見中、何度も、リビアでの生活を懐かしそうに語り、リビアの緑茶―実際には、茶色をしているが―を出してくれた。かれはエジプト国とリビア国の二つのパスポートをもち、帰国後も、いく度か陸路でリビアを訪れた。自分はエジプトとリビアの双方に帰属意識をもっていると述べていた。

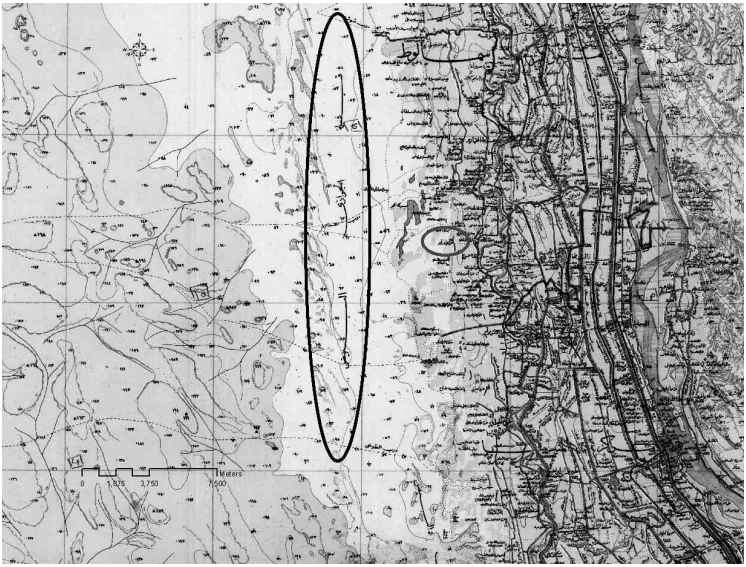
フラットは質素で、清潔であった。年金とイズバ（農場）からの収入で、夫婦二人が生活するのに十分であった。かれは農作物（綿花、小麦、とうもろこし）を収穫する五月と一〇月には必ず、イズバに行って、仕事を指示した。

多くの時間を読書と研究に当てたが、遊牧民、とりわけジャワーズィー族の文化伝統を守るための社会活動にも携っていた。もっとも力を入れていたのは、ジャワーズィー族が属していた遊牧民サアーディー部族集団の言語・民俗の

保持と進歩を目的とした文化センターの設立であり、そのための資金提供を人権問題のＮＧＯなどに訴えていた。親しくなってから、私に、「日本から援助をもらえないか。文化センターが立ち上げられたら、お前を監査顧問にしたい」と真剣に問いかけてきたことを、いまでも思い出す。

マスリー・キーラーニーは決して、政治的な人間ではなかった。しかし、若いときに抱いた政治への関心は、老いても持ち続けた。雑誌と新聞に載った遊牧民に関係する政治・社会記事は必ず切り抜いて、私にみせてくれた。エジプトの選挙区の区割りが、遊牧民出身の国会議員を生み出すようには出来ていないことを嘆き、それには政治的な意図があるのだとまで述べた。

つまり、遊牧民の定着村は、ジャワーズィー族がそうであるように、ナイル峡谷の端、耕地と砂漠の境界上に数珠繋ぎのように並んで立地してい



図版５　ジャワーズィー族の定住村が多く分布するミニヤ県サマルート郡の地図

耕地と砂漠の境界に、大きく「白ジャワーズィー族」の文字が見える。ジャワーズィー族には、「白ジャワーズィー族」と「赤ジャワーズィー族」があったが、二つの部族集団があったわけではなく、故郷リビアで居住していた地域が異なっていたところから、このように呼び分けられていた。小さな丸で囲まれたのは、「オマルの館」の立地点（100頁、図９参照）

る。したがって、現在のように、選挙区がナイル峡谷を輪切るように設定されるのではなく、ナイルの左右両岸で、ナイルに沿って縦割りに設定されたとするならば、少なくとも数名の遊牧民出身の国会議員が選ばれるだろう、と何度か主張したのである。それを聞いて、「なるほど、かれはよく考えている」と感じたものである（図版5）。以下は、彼自身の言葉である。

小さい頃から、その一員であるジャワーズィー族に対する誇りを抱き、その歴史を研究しようと思っていた。そこから、ジャワーズィー族の故郷であるリビアに関心をもった。青年時代から今日まで、ジャワーズィー族を団結させようと努めてきた。もっとも、その行動は、（政治的なものではなく）ジャワーズィー族成員に対する社会的な保護の確保をめざすものであったが。しかし、このことでさえ、さまざまな理由から実現していない。近年では、エジプトとリビアが不和であるため、その実施は一層、困難になっている。とりわけ、もしジャワーズィー族の団結が実現したならば、エジプトの国益に反することになるのではないかとの危惧から、一八一七年のエジプトへの移住後もリビアに残った少なからぬジャワーズィー族の成員が、（その後もエジプトに移らず）依然としてリビアに居住している。

2―2　研究者マスリー・キーラーニー

それでは、なぜマスリー・キーラーニーはオマル・マスリー「革命」に強い興味をもつようになったのであろうか。

まず指摘すべきは、かれの出自である。以下は、かれの手記からの引用である。

小さい頃より、リビアの歴史とリビア人のさまざまな集団について知識を集めることに興味をもっていた。また、リビアの独立問題についても関心をもっていた。大学での勉学をぬって、週に何度も、サイイド（預言者ムハンマドの親族に対する尊称）・イドリース・サヌーシー（一八九〇―一九八三　サヌーシー教団の第三代の長であり、後のリビア連合王国初代国王）を、（カイロの）ザマーレク（地区）のアフマド・ヘシュマト通りにあるかれの住居に訪ねた。と同時に、カイロのムハンマド・アリー通りにあるトリポリ・クラブに足しげく通った。そのクラブのメンバーは、反サイイド・イドリース・サヌーシーを表明していた。

また、最も有名な反サイイド・イドリース・サヌーシーの英雄、故バシール・ベク・サアダーウィーにカイロで会った。当時かれはサウジアラビアの国王、サウード家のアブデルアジーズの顧問を務めていた。こうして、カイロで多くのリビアの偉大な英雄たちと面識をもち、リビアの統一と独立に関するかれらの講演に立ち会った。

一九五一年一二月二四日、リビアの連合国家（キレナイカ、トリポリタニア、フェッザーン）としての独立が宣言され、サイイド・イドリース・サヌーシーがリビア国王に任命された。一九五二年一二月、国王イドリース・サヌーシーはカイロを訪問する。私は、ミニヤ・ハウス・ホテルで国王と私的な会見をした。その席で、国王は私をかれの法律顧問に任命しようと申し出てくれた。しかし、この任命は、（故イブラヒーム・ベク・シャラビーの意見によれば）側近たちからの国王への教唆によって、実現することはなかった。側近たちは、もしマスリー（・キーラーニー）がこのポストに就けば、かならずや、かれらすべてがことのほか恐れていたジャワーズィー

族の（リビアとエジプトにまたがる）支配が復活し、エジプト政府が行動をおこす引き金になるであろうと考えたのである（図版6）。

これは、かれの小さい頃よりの、リビアへの関心を示す文章である。その関心は、かれがジャワーズィー族に所属していたというところからくる。ジャワーズィー族は、現在に至るも、リビアのキレナイカ地方の有力部族であり、その一部が、一九世紀の初頭、そこからナイル峡谷のミニヤ地方に移住した。そのなかに、オマル・マスリーを先祖とする、マスリー・キーラーニーの一族がいた。

このジャワーズィー族の一員であるということ、そして歳を経て、かれが政治に興味をもつ青年であったことが、ジャワーズィー族の故郷であるリビアへの強い関心をもたらしたことは疑いない。マスリー・キーラーニー一族の居住地は耕地とリビア砂漠との境界にあり、空間的にはともかく、心理的には、リビアは身近な存在であったろう。また、現実に、第二次世界大戦前には、リビアの独立運動を展開したサヌーシー教団の勢力が頻繁にミニヤ地方に現れた。

多感な青年が、リビアの独立運動に関心を寄せるのは、自然であった。しかし、マスリー・キーラーニーがジャワーズィー族に抱く思い、そしてその英雄であるオマル・マスリーに対する憧憬は、少々度を越している。この点に関連

図版6　サヌーシー一族との交流を示す写真（アギーラ家所蔵）

リビア国王を囲んでのジャワーズィー族有力者の集合写真　カイロ郊外ギーザ，ピラミッドの前の高級ホテル・メナ・ハウスにて。

最前列中央がイドリース・サヌーシー一世，その右がマスリー・キーラーニーの父であるキーラーニー・アリー・オマル・マスリー

して、同じく強烈な感情をジャワーズィー族とオマル・マスリーに抱き、その歴史を記録にとどめようとしている点は同じながら、マスリー・キーラーニーとその甥ターハー・キーラーニーとの間に、微妙な関心の違いがみられることは興味深い。

つまり、ターハー・キーラーニーがジャワーズィー族を出発点として、遊牧民全体へと興味を拡大していくのに対して、マスリー・キーラーニーは、同じくジャワーズィー族から出発しながらも、その関心を英雄オマル・マスリーの「革命」に収斂させていくのである。おそらく、この違いを生み出したのは、エジプト在住ジャワーズィー族における、それぞれの父の社会的存在の大きさである。

マスリー・キーラーニーの父、キーラーニー・アリーは、ジャワーズィー族のウムダの一人であった（図版7）。ウムダ職は、近代エジプト地方行政の上では、村の長、つまり村長の意味で使われている。そのウムダ職が、一九〇五・六年の法令に基づいて、遊牧民出自の住民に使用されたということは、とりもなおさず、当時、遊牧民の定住化が進展し、「遊牧民」の行政上の「農民」化が法制化されたことを意味している（加藤 1997a:71-72）。

言葉を換えれば、マスリー・キーラーニーの一族

図版7　ムハンマド・イドリース、マフディー・サヌーシーからエジプト在住ジャワーズィー族有力者への文書（1939年7月）

冒頭で列挙されている有力者の筆頭に、「白ジャワーズィー族」のウムダ、キーラーニー・ベク・アリー・マスリーの名前が見える。

は、その帰属意識はともかく、行政上は、「農民」となったのであり、そのウムダであるマスリー・キーラーニーの父は、村役人であるとともに「地主」であった。マスリー・キーラーニー本人も、先に指摘したように、地主としてイズバを所有していたが、これは、父から相続した資産であったものと思われる。

とはいえ、この措置によって、「遊牧民」が「農民」とまったく同じ「国民」となったわけではない。かれらには、依然として、それまでの遊牧民に対する徴兵免除特権が認められていたからである（同上文献を参照）。つまり、徴税上の観点からは、「遊牧民」は一般の「農民」と同じく、村単位に登録されたものの、徴兵上の観点からは、新たに施行された「遊牧民」ウムダ制のもとに登録されることによって、それまでの徴兵免除特権は保証されていた。

しかし、この特権も、エジプト革命後の一九五六年、遊牧民の部族制度（niẓām al-qabāʾil）が廃止されることによって、失うことになった。つまり、この年、村と「遊牧民」の有力首長（ウムダ）との双方で登録される二重登録制が廃止され、「遊牧民」は晴れて、一般の「農民」と同じ身分と資格をもつ「国民」となったのである。

この結果、マスリー・キーラーニーの身に起こったこと、それは、かれが父の後を継いで、ジャワーズィー族のウムダになれなかったことである。かれは、部族制廃止にたびたび言及し、この措置に対して大きなこだわりをもっていた。もちろん、「遊牧民」の二重登録制が廃止されず、続いていたとしても、かれがウムダに選ばれたかどうかはわからない。しかし、かれとの会話のなかで、言葉の端々からうかがわれたのは、「世が世なら、自分はジャワーズィー族のウムダである」とのかれの強い思いであった。

かくして、マスリー・キーラーニーの英雄オマル・マスリーの「革命」への強い関心の背景には、父の存在と父に対する誇りがあった。それは、従兄ハーリド・アブデルカウィーへの対抗心として現れていた。ハーリド・アブデル

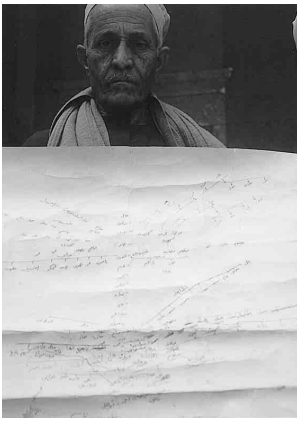
カウィーは、すでに述べたように、父キーラーニーの四人の兄弟の長男、アブデルカウィーの息子である。

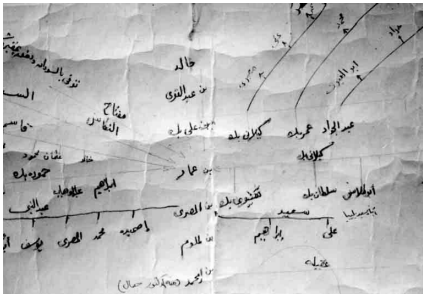
アブデルカウィーは長男であるうえ、ほかの兄弟とは大きく歳が離れていた。したがって、普通に考えて、ジャワーズィー族のウムダは、マスリー・キーラーニーの父キーラーニーではなく、この長男アブデルカウィーがなってもよさそうである。実際、長男であることの配慮はなされていたであろうことは、その息子ハーリドが、「オマルの館」の主人として、そこに住んでいたことから想像される。現実には、ジャワーズィー族のウムダはマスリー・キーラーニーの父キーラーニーになった。

父がウムダに選ばれた理由を、マスリー・キーラーニーは、「かれが強い性格と深い考えをもっていたから」と述べていた。このことは、逆に、長男アブデルカウィーがその資質にかけていたことを暗に示唆している。そして、この評価は、マスリー・キーラーニーのアブデルカウィーの息子ハーリド、つまり「オマルの館」の主人、従兄のハーリド・アブデルカウィーの言動に対する厳しい批判の言葉と重なっている。先に引用した、一九九一年一二月二四日付の私への最初の手紙のなかで、マスリー・キーラーニーは次のように述べている。

> 私の従兄、シェイフ・ハーリドは歴史の専門家ではない。そのため、かれがあなたに語ったことから、十分な事実を引き出すことは出来ないであろうし、かれがあなたに与えた情報は修正する必要があろう。

確かに、ハーリド・アブデルカウィーには、少々気性の激しいところがあり、物事を理詰めに考えないところがある。しかし、「革命」を思う気持ちは同じく大きい。一九九二年（二月一一日付）には、一九九一年九月一六日にお





図版８　ハーリド・アブデルカウィー作成のジャワーズィー族の系図
左　手作りの系図を手にするハーリド・アブデルカウィー。
右　ハーリド・アブデルカウィーの名前が族図の中心にある。

ける私の最初の「オマルの館」訪問を感謝する手紙を、家族写真とともに、日本に送ってくれた。かれとは都合五回、「オマルの館」で会見したが、[4]そのつど貴重な情報を与えてくれた。

かれがアラビア語の古典をもとに、手書きで系図を作成していたことは、先に指摘したが、それは、かれ自身へといたる系図であった（図版８）。ハーリド・アブデルカウィーもまた、一族の代表であるとの気概をもっていたのである。このように考えると、マスリー・キーラーニーのハーリド・アブデルカウィーに対する厳しい評価には、かれに対する対抗心が混じっていたように思われる。

マスリー・キーラーニーは深く父を慕っていた。このことは、「革命」の情報源として、父がたびたび上げられたことからもわかる。そして、この自慢の父をとりまく人間関係が、マスリー・キーラーニーの自意識を刺激したに違いない。実際、かれは、先の「経歴」紹介でも触れたように、自分の人生の節目ごとに、部族を中心とした親族・有力者・知識人・友人からの個人的な「引き」があったことを述べている。そのなかでも、かれがとりわけ熱をこめて語る人物は、叔父の一人、つまり父の姉妹の息子、アブデルハミード・

アギーラである。

かれは一九〇〇年ぐらいに生まれた。初等教育しか受けていなかったにもかかわらず、かれは、カイロに住み、そこで広い社会関係をもって、多くのエジプト社会での傑出した人物たち、さらにリビア、サウジアラビアそのほかのアラブ地域の有力者たちと交友を結んだ。晩年（一九六八年ごろ死去）には、一九五二年のエジプト革命後に設立されたイスラム会議の事務局で働いた。

マスリー・キーラーニーによれば、このアブデルハミード・アギーラが滞在していたカイロ中心街のホテルで、著名なジャーナリストで文学者のハビーブ・ジャマーティー（一八九六―一九六八）に偶然に会い、かれに「革命」の存在を教えたことが、先の拙稿で紹介した「オマル・マスリーとマグリブ帽」執筆へとつながった（その経緯については、加藤 1997b:128を参照）。

つまり、マスリー・キーラーニーが、アブデルハミード・アギーラを中心とした有識者のサークルに参加することが出来、たまたまそのサークルで、ハビーブ・ジャマーティーと出会ったという偶然が、「革命」を題材とし、「革命」そのものを扱った唯一の文献といってよい文学作品を生み出したということになる。このような多彩な交流関係こそが、「革命」研究者マスリー・キーラーニーを誕生させる知的土壌であった。

一九七一年から一九八五年までのリビア滞在は、かれの「革命」に関する知識を飛躍的に増大させたであろう。そもそも、かれ自身の言葉によれば、一九七一年にリビアへの赴任を決意させた大きな理由は、「革命」についてもっと知りたいという知的欲求であった。実際、リビア滞在中に、伝承や詩を含む、ジャワーズィー族に関する多くの情報が収集された。とりわけかれが関心をもったのは、ジャワーズィー族がリビアからエジプトへ移住した経緯であっ

た。

かくて、リビア在住のジャワーズィー族と、一九世紀初頭におけるジャワーズィー族のエジプトへの移住に関する情報が集められ、その一部は、後に紹介するかれの「革命」論文に生かされている。また、こうした情報は整理、保存されていたのであろう、私との繰り返される会見のたびに、私の質問に応じる形で、最初は口頭で、後になっては「手記」という形で、私に惜しげもなく提供された。現在の私には、それを十分に消化する能力も時間もないが、そのおかげで、私の「革命」研究は効率的に、そしてふくらみをもって展開することができた。

リビアからエジプトへ戻ってからのかれは、年金生活に入り、イズバでの農場経営をしながら、悠々自適の生活を送った。そのなかで、片時も「革命」のことを忘れなかった。「革命」関係はもちろん、ジャワーズィー族ほか遊牧民に関する記事を雑誌や新聞で見つけると、それらを切り抜いた。研究書に「革命」が言及されていないことから、みずから関連文献と資料を渉猟するために、何度もエジプト国立図書館とエジプト国立文書館に足を運んだ。かれが所在を確認した「革命」関係の文献と文書の数は、相当な数にのぼる。(5)

3　「革命」論文の翻訳

マスリー・キーラーニー本人によれば、リビアへ赴任した年の一九七一年あるいは一九七二年、かれは「エジプトにおけるリビア諸部族の革命」と題された論文を執筆した。執筆後、かれはこの論文を何度も雑誌に投稿したが、いずれも受理されなかったという。以下に翻訳する論文は、エジプトに戻った後、このリビアで執筆した論文を書き

直したものである。そこには、マスリー・キーラーニーの「革命」に対する問題関心の所在と、研究者としての資質がよく示されている。

3―1　マスリー・キーラーニー・マスリー著「オマル・マスリー革命」

一八五四年、ムハンマド・アリー・パシャの末子、ムハンマド・サイードがエジプトの統治者となった。かれはその生い立ち、教育、幼少の頃から多くのヨーロッパ人と接触するという環境から大きな影響を受けた。そのため、西洋文明に傾倒し、エジプトをヨーロッパの一部にしようとたゆまなく努め、時代の要請に見合う最新の方式に基づいてエジプト軍を再編することを強く望んだ。

それに先立って、年ごとにエジプト軍が解体され、弱体化していったのは明らかであった。エジプト総督（wālī）ムハンマド・サイードは、軍を増強するため、エジプトの一部地方とエジプトの西部国境で遊牧しているリビアの諸部族（qabāʾil）の人員をもって軍を補強しようと思い立った。ミニヤ地方に住み着いていたジャワーズィー族（qabīla）が、この目的の実現のために、エジプト総督が最初に目をつけた部族であった。というのも、この部族は、民の数が多く、戦闘でのかれらの力強さ、勇気、忍耐強さは有名であったからである。

ジャワーズィー族は西暦一九世紀の一〇年代の末に、（リビアの）キレナイカ地方からエジプトに移住した。この部族は、キレナイカ地方を遊牧しているサアーディー部族集団（qabāʾil）（原注1）に所属する大部族の一つで、最も勇気に富む部族とみなされている。部族の移住は、かれらの指導者（zaʿīm）アブデルナビー・イムトリード（原注2）の死後であっ

た。この指導者は、寛容な精神とすばらしい組織力とにおいて傑出し、サアーディー部族集団において他の追従を許さぬ、著名な指導者であった。かれは、その行動力から、キレナイカ地方の「ロバ」というニックネームをつけられた。これは、あだ名づけとして知られている方法であり、敬意と尊敬を表す目的から用いられる。

ジャワーズィー族の移住について言えば、それはそもそも、この部族が当時リビアを支配していたカラマンリー家(usra)一族間の支配をめぐる争いに巻き込まれたことに端を発する。ジャワーズィー族は大部族として重要であった。また、かれらは、親類関係を通してカラマンリー家と結びついていた。そのため、部族の指導者アブデルナビー・イムトリードの死後、部族のシャイフたちは(カラマンリー家に)忠誠を誓った。このようなかで、この(カラマンリー)家の一族は、かれらの間に起きた紛争においてジャワーズィー族を利用しようとした。

まず最初に、アフマド二世パシャ・カラマンリーが、息子ムハンマド・バーイに唆されて対立するに至った兄弟ユーセフ・パシャとの敵対のなかで、ジャワーズィー族に助けを求めた。次いで今度は、ムハンマド・バーイ本人が、次男アフマド・バーイに唆された父(ユーセフ)パシャの支配から離れんとして、ジャワーズィー族に助けを求めた。ユーセフ・パシャは二人の敵対者(アフマド二世パシャとムハンマド・バーイ)を制圧した。その結果、(この二人の敵対者に味方した)ジャワーズィー族は、陰謀と策謀から逃れるため、キレナイカ地方からエジプトへの移住を余儀なくされた。

それ以前、事態は、ジャワーズィー族の四五名のシェイフ(指導者)が騙され、暗殺によって虐殺されるまでになっていた。かれらは、両陣営の和平と合意の証として、ベンガジの政府の館で、アフマド・バーイその人とともにコーヒーを飲んでいた(ときに殺された)。その他に、友好の意思が本当であることを示すために、部族が全くの自由意

思から自発的にトリポリの（アフマド二世）パシャのもとに送った二三名の部族民の人質も殺された。また事件のなかで、少なからぬ部族民の男、女、子供が命を落とした。さらに、部族は財産を失った。その損失は、最後の敵対のときだけでも、ラクダ四、〇〇〇頭、羊一〇、〇〇〇頭、牛六、〇〇〇頭、巨額の金品のほか、奴隷多数に達した。（原注3）

エジプトでのジャワーズィー族の指導者はアブデルナビー・イムトリードの孫、オマル・マスリーに移った。（ジャワーズィー族のエジプト居住をめぐる）エジプト総督とかれとの交渉が開始された。それは、トルコ、チェルケス人のエジプト軍将校団がお膳立てした交渉であった。（一方の側の）オマル・マスリーが要求し、他方の側（のエジプト総督）が拒絶した次の二つの条項を除いて、両者の間に、協力のためのすべての条項について合意をみた。

合意をみなかった二つの条項とは、（一つは）徴兵は志願によるものであって、強制によるものではない（という条項）であり、（もう一つは）徴兵された部族民たちは引き続きかれらのリビア服、とりわけ青色の重い房のついたマグリブ帽（tarbūsh）を身につける（という条項）であった。

この二つの条項をめぐって対立が生じた。エジプト総督は徴兵方法に関する第一の条項については、これを認めた。しかし、かれは第二の条項については、これを受け入れることを拒否し、あくまでも徴兵された部族民がエジプト兵士の（制）服を着るよう主張した。それは、かれが（軍）服の統一を望み、新しい軍隊の構成に不統一な要素が入ることを嫌ったからである。

しかし、他方、オマル・マスリーはかれの部族民（banū qawm-hu）がかれらの服とマグリブ帽を（徴兵後も）引き続き着用することを主張した。両者間の交渉は決裂した。オマル・マスリーはエジプト総督の命令への反抗と、政府への不服従を宣言した。また、エジプト総督がかれをカイロに召還した際には、エジプト総督に会いに行くことを

拒否した。

ファイユーム、ベニー・スエフ、ミニヤ、アシュート地方に住むリビア諸部族（qabāʾil）の多数の男たちがオマル・マスリーの意見に賛同し、かれに合流した。かれらは抵抗と敵対を宣言した。これら地方の治安軍は事態の掌握に乗り出した。地方治安軍と諸部族民との間に武力衝突が生じた。その結果、地方治安軍は全く何もできないこと、（当該）地域のすべてが地方治安軍の手から離れたことが明らかになった。事実、これらの地方はほとんどすべて、オマル・マスリー集団（jamāʿa）の支配下に置かれることになった。

当時、エジプト軍を牛耳っていたトルコ、チェルケス人士官たちは、エジプト総督がリビア諸部族民に関心をもち、かれらとの合意を求め、かれらの特異な行動に好意をもっていることを面白く思っていなかった。そこで、かれらは、エジプト総督がかれら（遊牧民）の要求を力と暴力の前で飲み込まざるをえないような状況をつくりだした。エジプト総督がオマル・マスリーとかれの集団（jamāʿat-hu）に怒りを向けさせるようにするためである。

士官たちの努力は結果的に、報われることになった。エジプト総督ムハンマド・サイードはリビア諸部族を罰し、無条件でかれらをかれの行政に服させるため、かれらに対する遠征軍の派遣を決定した。この遠征軍は、主にミニヤ、ファイユーム地方に向かった。というのも、オマル・マスリーとかれの援助者たちの主力軍はそこに結集していたからである。

力と暴力の信奉者である（エジプト軍の）士官たちは、他のリビア部族民をオマル・マスリー隊との戦闘に使おうと考えた。そこで、かれらは、エジプトの（地中海）北西海岸部に住むアウラード・アリー族（qabīla）に使者を送った。使者たちは、ともに遠征に参加し、ジャワーズィー族を襲おうと説得した。かれらの説得は成功し、（アウラー

ド・アリー）族の一部の集団（'ashā'ir）が説得に応じた。カイロでは、軍団を組織し、それをできるだけ早く反乱地域に派遣するための準備が始まった。

ジャワーズィー族は、（エジプト軍の）斥候隊がカイロとギーザの基地を出発し、かれらに向かう前に、急拠、戦いのために結集した。ジャワーズィー族のうち、武器を担げるすべての男と女は、武器へと殺到した。かれらは近隣のリビア部族民（'ashā'ir）に助けを求めた。部族民の多く、とりわけタルフーナ、ジュフマ、アマーイム族（qabā'il）がかれらに合流した。また、他の諸部族（qabā'il）も、可能な範囲で、武器、糧食（の提供）でもってかれらを助けた。

戦いの英雄であり、経験豊かなかれらの指導者、オマル・マスリーが蜂起軍の指揮者の任についた。これに対し、エジプト政府は、オマル・マスリーをお尋ね者の犯罪者とみなし、生きてであろうが、死体としてであろうが、かれを政府に差し出す者に対して懸賞金を用意した。また、そこを通過してかれがリビア、あるいはスーダンへ逃亡しないよう、西部、南部国境の守衛所に対し、政府通達を出した。

オマル・マスリーはエジプト軍との正面衝突を避けるつもりであった。アラブの血を流させないためである。かれは、心中、かれの部族、そしてかれの部族に合流した他の諸部族とともに、キレナイカ地方に戻ろうと決心していた。それというのも、かれはトルコ人のエジプト総督と合意しようとしたにもかかわらず、かれの努力は報われず、エジプト総督の取り巻き連はかれに対してたびたび陰謀を仕掛けてきたからである。

トルコ人の支配者たちがリビア諸部族民、さらにはほかならぬエジプト民衆にさえ抱いている嫌悪と侮蔑の感情は、誰の目にも明らかとなった。オマル・マスリーは、かれの同胞たち（qawm）とともに、ミニヤ、アシュート地方を

経由して南方に進路をとり、次いで、西方、ダハラ・オアシス方面、キレナイカ地方へと至る道を進んだ。

かれは（次のような）命令を出したが、それは純粋なアラブの慣習（taqālīd）に基づく、明白かつ厳しいものだった。

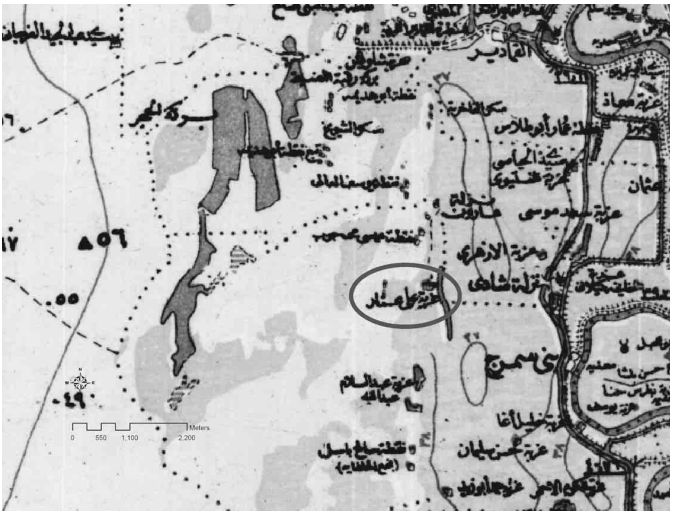
1．身を守るため以外には、エジプト民衆を襲ってはならない。

2．いかなる事情といえども、エジプト人の老人、身体障害者、女、子供と敵対してはならない。

3．同胞たち（qawm）のリビアへの旅を助けるために限られた頭数の馬、ラクダを捕獲することは許されるが、それ以外に、エジプト民衆の資産を破壊したり、かれらの財産を略奪してはならない。

こうしたなか、（エジプト政府の）遠征軍は準備を終えた。野戦砲が装備され、軍は、（兵を）反乱地方ごとに差し向けるために、多くの隊に分けられた。（原注4）（派遣された）軍は、反乱地方のそれぞれにおいて、旅立った（リビア）諸部族の残党分子を殺戮し、かれらの女、子供を虐待した。また、家屋を破壊し、内部（の家具）を壊し、燃やした。

エジプト総督ムハンマド・サイード自らは、ミニヤ地方への遠征軍に同伴することを選んだ。かくて、ナイル峡谷とリビア砂漠とが出会う地点、「オマル・マスリーの館（qaṣr ʻumar al-maṣrī）」（その現在の景観については、付録を参照）と呼ばれたオマル・マスリーの住まいに到着した（図版9）。しかし、（そこに）オマル・マスリーはいなかった。サイードは、（オマル・マスリーの）同胞たちが（すでに）住まいから出立したことを知った。そこでかれは、大砲を打ち込むことによって住まいを破壊することを命じ、自らの目でこの命令が実施されることを確かめた。そして、オマル・マスリーとその集団（jamāʻa）を追跡し、リビアへ逃げおおせる前にかれらを殺せと指示を出した後、



図版９　ミニヤ県サマルート郡の地図

「オマルの館」の名前は見られないが、イズバ・アリー・オマル（マスリー・キーラーニーの祖父）の名前が見える。

カイロへ戻った。

オマル・マスリーは、ダハラ・オアシスに到着した時、かれの援助者から、アウラード・アリー族の一隊の援護をうけたエジプト軍がかれを追跡しているとの情報を受け取った。かれは、このまま旅を続けることは自分の名声にそぐわないと考えた。そこで、（ダハラ・オアシスに）留まり、決戦において（追跡）軍を迎え撃つことにした。

ここにおいて、オマル・マスリーの世間知、戦闘での体験が示されることになった。かれは自ら戦いの場所と時を決めたが、それは現在支配的な最新の軍事理論の原則と一致するものであった。かくて、かれはダハラ・オアシスのバラート村に近いある広い場所を、迎え撃つに相応しい戦場として選んだ。この場所に、敵の襲撃に備えて、かれと武器をもつことのできるかれのすべての集団が配置についた。

それ以前、オマル・マスリーは、かれが相応しいと判断した地点に攻撃兵を振り分け、待機させた。また、戦闘で

かれに仕えるべき者たちを除き、年寄り、女、子供を、予想される戦場から遠ざけるよう命令した。

遠征軍は迎え撃たれた。両軍は危険で激しい戦闘のなかで入り乱れ、（戦いの）決着はつきそうになかった。両軍は拮抗していた。遠征軍は数において大幅に勝っていた。しかし、オマル・マスリーの集団（jamāʿa）は類稀な勇気と高い士気を示し、そのため、かれらの思惑とは異なり、敵は勝利を得ることができないでいた。

そのとき、戦局に思いがけない事態が生じた。その結果、戦局は急速に、ジャワーズィー（族）とその友軍に有利となった。思いがけない事態とは、遠征軍に同伴していたアウラード・アリー族のシェイフの一人、マフムード・アルワーニーが正気に戻ったことである。かれはかれの部族民（banī qawm-hu）を集め、かれらに向って次のように叫んだ。

サアーディー（部族集団）が（同じ）サアーディーと戦った時があったか。正面に敵の攻撃を受けている間に、ベドウィンが兄弟のベドウィンを背後から刺すような時があったか。ジャワーズィー（族）はあなたたちが纏っているこのバーヌース・マント、あなたたちが頭に被っているこのタルブーシュ帽のために戦っているのだ。

この鷹（つまりオマル・マスリー）が空に舞っている間は、あなたたちは祝福され続けるだろう。しかし、トルコ人のエジプト総督が鷹に勝利するならば、（その時）今度は、かれは勝利の後、あなたたちに振り向き、あなたたちを殺すだろう。さあ、戦闘をやめよ、アウラード・アリーよ。あなたたちが流す血はあなたたちの血だ。あなたたちがその幕を破る住まい、あなたたちがそのロープを引き抜くテントは、あなたたちの住まいであり、

テントだ。

アウラード・アリーのシェイフたちは話し合った。かれらは、トルコ人の支配者のご機嫌を取るために従兄弟のベドウィンと戦うことは自分たちに相応しくないとして、戦闘からの撤退を決定した。アウラード・アリーの撤退はエジプト軍の戦列に亀裂をもたらした。オマル・マスリーはエジプト軍の兵の大部分を殺した。生き残った（エジプト軍の）兵に対して、退却命令が出された。

かくて、オマル・マスリーとその集団（jamāʿa）に最終的な勝利がもたらされた。（原注5）オマル・マスリーは戦闘のなかで自らの勇敢さを示した。乗っていた馬は三頭も殺された。かれは、馬が殺されるごとに、違う馬に乗り換えた。（原注6）

オマル・マスリーとその集団は、戦闘の終了後、一日だけ戦場に留まった。かれらは、その一日を、殉死者の埋葬と、神のご加護を願いつつかれらのためにラクダを屠るのにあてた。そして、かれらは旅立ち、キレナイカ地方に達した。かれらはそこで、サルート市の近く、かれらと従兄弟関係にあるアワーキール族（qabīla）の隣に住み着いた。（原注7）

ここで注意すべきは、オマル・マスリーのキレナイカ地方への帰還が（身の）安全を求めたためではなかったということである。オマル・マスリーは、バラートの戦いでの圧倒的勝利の結果、エジプトに住むリビア諸部族のすべてを彼の回りに参集させることができたであろう。その結果、おそらくオマル・マスリーは、エジプトにおけるかれの国（diyār）に居を構え、当時のエジプト統治機構のなかで影響を与えることができたであろう。

しかし、オマル・マスリーは、リビアのアラブ遊牧民（shaʿb）のほとんどがそうであるように、アラビア半島のネジュドを故郷とする母なる部族（qabīla）、すなわちバニー・スレイム族に属している。ネジュド地方人の間に受

け継がれてきた慣習（taqālīd）に従えば、（戦いでの）勝利者は、かれが敵に勝利した地点から旅立たねばならない。というのも、（敗れた）敵に頭をさげさせることを好しとしなかったからである。つまり、オマル・マスリーがリビアに戻ったのも、ベドウィンの慣習に忠実でありたいとのかれに受け継がれた精神がかれを圧倒したからである。

オマル・マスリーの集団（jamā'a）がエジプト総督ムハンマド・サイードに対して語ったものとして、キレナイカ地方の砂漠の古老たちが繰り返す（言葉がある）。（この言葉が語られた時）オマル・マスリーの集団はすでに、キレナイカ地方のかれらの故郷に戻る準備を始めていた。

（それは）エジプト総督ムハンマド・サイードが、農民の家長（rabb usra）一人あたり五フェッダーン（約一エーカー）の割合で、政府の土地をエジプト農民に分配するという新政策を実施し、そこから利益を引き出そうとしたときのことである。ナイル峡谷に移住したジャワーズィー（族）の一部も、この（種の）土地を取得し、利用できることが明らかになった。そこで、オマル・マスリーの集団はエジプト総督ムハンマド・サイードに次のように言ったのである。

ここ（エジプト）には、あなたの土地がある、サイードよ。

（しかし、いまやわれわれには）キレナイカ地方が戻ってきた。（原注8）

このリビアの指導者（原注9）（オマル・マスリー）は引き続き一八六三年までキレナイカ地方に居住した。一八六三年、（エジプト）政府はオマル・マスリーとかれの仲間たちを（エジプトに）呼び戻すための使いを送った。その（使書

の）なかで、政府はオマル・マスリーたちが主張した（帰還のための）条件を受け入れることを明らかにした。

かれらは呼びかけに答え、エジプトに戻った。かれらに、西部国境地域を警備し、盗賊の襲撃からキャラバン・ルートを守ることが任された。また、かれらがかつてもっていた（特権）、つまりエジプト軍への強制的徴兵に従う義務はなく、戦争でエジプト軍に協力する際にも、かれらのリビア服を身につけてよいことが、そのまま（従来通り、かれらの特権）として認められた。（原注10）

こうして、オマル・マスリー革命（thawra）は、一部の歴史家が述べるような、襲撃でも略奪でもなく、国に無秩序と騒乱を起こすことを目的としたものでもなかった。そうではなくて、それは、その本質において、自由（hurrīya）と高貴さ（kirāma）を守るためのものであった。そして、オマル・マスリーが蜂起したのも、当時の支配者たちが策略と裏切りの政治を好んだからであった。

ヘディーウ（副王）・イスマイールの時代（一八六三―七九）に再び同胞たちの指導者となったオマル・マスリーは、ことあるたびに、次のように言明していた。

> われわれは盗賊ではなかった。われわれは悪漢ではなかった。われわれは抑圧者ではなかった。しかしながら、悪意をもつ仲介者がいた。かれらは陰謀をめぐらし、われわれを、われわれの高貴さを守るための不幸な戦いに引き込んだ。われわれは、いかなる環境、時、状況にあっても、アラブの精神（ʿurūba）に仕え、それを高める鋭い刃であり、正義の槍であった。そして、そのために、われわれはエジプト人の兄弟たちと協力した。

ジャワーズィー（族）はアラブの民族精神（al-qawmīya al-ʻarabīya）に鼓舞されていたと述べるオマル・マスリーの言葉は真実であり、そこに誇張はない。かれらは、戦争において、エジプトの子供たち（abnā）とともに歩み、ともに血を流し、命を落とした。かれらはシリア、パレスチナ、レバノン、アラビア半島、スーダンの地でのすべての戦争に参加した。（スーダンの）シンディ市に一つの墓があるが、そこには何百ものジャワーズィー（族）の遺体が眠っている。そのなかに、オマル・マスリー本人の息子、ミフターフがいる。一時、ジャワーズィー（族）は、エジプト軍に配属されたベドウィン諸部族民の全体の四二パーセントを占めていた。（原注11）

こうして、エジプトにおけるジャワーズィー（族）とリビア諸部族の革命は終わった。歴史家たちは、この革命をオマル・マスリー革命と呼ぶことに同意した。しかしながら、この革命については、いまだそれに見合った十分な注意が向けられておらず、必要な研究もなされていない。一体どのようにして、一人のベドウィンの男（オマル・マスリー）は、かれとかれの同胞たちにかれらの（伝統）服を放棄させよ、というそれ自体は何の変哲もない情報のなかに、ベドウィンとしてのかれらの生活と故郷へのかれらの思いに対する否定、つまりはかれらの高貴さへの蔑（さげす）みを嗅ぎとったのであろうか。

かれはそれに立ち向かった。かれを守るものは信念しかなかったのに。トルコ人のエジプト総督は、自らが体現する権力と力のすべてでもって、彼に対応した。このベドウィンは信念を変えることなく、かれの信念のために首尾よく戦った。戦いの結果として、かれに勝利がもたらされた。かれは引き続き（伝統）服と高貴さを保持した。

この意味で、オマル・マスリー革命は、高貴さに対する誇り、誇りを守ることへのこだわりに関する、気高き（行為の）事例である。それは価値ある、貴重な事例である。それゆえに、この革命は、忘却のなかから取り出され、リ

ビアのアラブ人がその長年にわたる歩みのなかで実現した偉大で傑出した行為の一つとして、示されねばならない。（原注12）

原注

（原注1）　サアーディーは、「バニー・スレイム」族（qabīla）の最も重要な支族であり、そのすばらしさは、その名前が寛容さ、高貴さ、義侠心を示すほどであった。キレナイカ地方の砂漠でサアーディーの男といえば、最高度に男気に富み、気高い性格をもつ男を意味した。サアーディーは、バニー・スレイムの有名な英雄のひとり、アブー・ライル（「夜の息子」の意味）のニックネームをもつ「ムハンマド・ザイブ」の子供たちである。サアーディーという名は、かれらの母、サアディーに由来する。かの女はザナータ族の偉人の娘である。ザナータ族は、ムイッズ・ブン・バーディースとともにバニー・スレイムと戦ったが、（リビアに）定住した。ムハンマド・ザイブはかれらと婚姻関係を結び、その結果、現在、リビア合衆国の東部地方とエジプト・アラブ共和国の西部地方に居住する大多数の部族は、サアーディーと関係をもつことになった。ジャワーズィーといえば、かれらはハムザ・ブン・ジブリール・ブン・バルグース・ブン・ムハンマド・ザイブの子供たちであり、かれらの場合、その名は、かれらの母、ジャーズィヤに由来する。

（原注2）　このリビアの傑出した英雄は、アルマン市に葬られた。かれは、盗人に対して、盗んだものが何であろうとも、その八倍の（金額を）支払うことを命じたといわれている。キレナイカ地方の住民に伝わる、この英雄を称える詩のなかには、次のような節がある。

やー、イムトリードの子孫たち
それは、英雄から英雄へとつながる
英雄の性格は、学んで得られるものではない

（原注3）　多くのアラブと外国の著述者たちの優れた作品のなかで、ジャワーズィー族のキレナイカ地方から（エジプトへ）の移住とそれを取り巻いた環境が、詳細に扱われている。その例として、いくつかの作品を挙げれば、以下の通りである。

(1)　Muḥammad al-Ṭayyib bun Idrīs al-Ashhab, *barqa al-'arabīya ams wa al-yawm*, 1946, pp.109—.

(2)　al-Hādī Muṣṭafā Abūqimma, *akhbār al-ḥamla al-'askarīya 'alā barqa fī sana 1817*. なお、これは、アフマド・バーイの軍隊と同行したイタリアの医者、パウロ・デ・ラーシーラー（？）の手記を収録し、翻訳したものである。

(3)　同じ著者の *dirāsāt lībya*, series no.1, July 1968, pp.111—と、*sīrat al-bāy aḥmad al-qarmānlī 'alā barqa fī sana* 1817.

(4)　Muḥammad Muṣṭafā Bāzāma, *banghāzī 'abr al-tārīkh*, vol.1, 1968, pp.265—.

(5)　イタリア人著述家、ルドルフ・ミカーキー（？）の *ṭarābuls taḥta al-ḥukm al-qarmānlī*.

（原注4）　いくつかのエジプトの著作には、革命を鎮圧するために用意された軍事遠征のための装備、この遠征が向った場所、さまざまな遠征部隊を指揮した将校たちの名前に関する詳細な解説が含まれている。そのひとつが、エジプトの軍事学校の前校長、イスマイール・シルハンクが執筆した著作である。

（原注5）　「アウラード・アリー」の過激な若者たちは、トルコ人の総督に取り入り、オマル・マスリーの殺害を望んだ。かれらのひとりは、次のように語ったといわれている。

もしマフムードの意見なかりせば
われわれはオマルを見ることはなかったであろう

その意味は、次の通りである。「もしマフムード・アルワーニーがそれをやめよと言わなかったならば、われわれはオマル・マスリーを捕え、殺していただろう」。

（原注6）　この戦いに立ち会ったジャワーズィー族の女の詩人は、ひとつの詩を作り、そのなかでオマル・マスリーの勇猛さとともに、戦場での戦いの激しさを謳った。われわれは、この詩からの次のふたつの節（を指摘するだけで）満足しよう。

オマルは剣を抜き切りつけ、それを何回も繰り返す
（敵は）すべて与しやすしと繰り返し襲いかかる
（結果は）かれらは犠牲祭での動物のごときありさま

（原注7）　ジャワーズィー族の本来の居住地域については、以下のことが知られている。それは、ベンガジ市から南と東南に広がり、シャリズィーマとティルムーンに、そしてカミニス・ファルバフルへといたる土地である。この土地の大部分は、ジャワーズィー族がエジプトに移った後、アワーキール族に帰属するようになった。この点については、イタリア人の著作家、エンリコ・デ・オーグスティン（?）による著作『*sukkān barqa*（バラカ地方の住民）』を参照のこと。

（原注8）　ベンガジの弁護士マフムード・マフルーフの逸話から。この逸話は、次の文献にみられる。Muṣṭafā Ba'yū, *al-muḫtār fī marājiʿ tārīkh libīya*, vol.2, first ed., p.171.

（原注9）　オマル・マスリーは、大変に背丈が低かった。かれについては、次のように言われている。かれが寝ているとき、ひとりの女が手でもって、かれの背丈を計ろうとした。かの女の手がかれの心臓まで来たとき、オマル・マスリーはかの女に言った。「やめなさい。ここにいるのはオマル・マスリーだ」。そして、男となるのは、身体によってではなく、心によってなのだ、と述べた。ムスタファー・バアユーは、先に引用したかれの本のなかで、このリビアの英雄ゴーマについて、かれの豪胆さはかれの短躯と関係なかった旨の類似の話があると指摘している。

（原注10）　エジプトにおけるリビア諸部族は、一九四九年にこの免除が撤廃されるまで、引き続き、民族的特権（imtiyāz

'anṣarī）を認める文書によって、強制的な徴兵から免除されていた。その後、一九五六年、エジプトに居住する部族に関する公式の制度が廃止された。それにともない、いくつかのリビア部族問題監督省によって担われていた（部族）行政が廃止されることになった。

（原注11）この点については、'Umar Riḍā Kuḥāla, *mu'jam qabā'il al-'arab al-qadīma wa al-ḥadītha*, vol.1, p.219, Damascus, 1949ゝ Aḥmad Luṭfī al-Sayyid, *qabā'il al-'arab fī miṣr* を参照のこと。

（原注12）私はエジプトの作家、故ハビーブ・ジャマーティーがオマル・マスリーの革命に関する物語の執筆を準備する段階において、かれに協力し、信頼のおける歴史資料に当たった。そのもっとも重要なものは、アブディーン宮殿の文書館に所蔵されている文書と、エジプト国立図書館における豊富な文献である。この物語は、一九五一年一二月に、「オマル・マスリーとマグリブ帽」という題名のもとで出版された。それは、エジプトの「ムサッワル」誌上で、故ハビーブ・ジャマーティー氏による「歴史に忘れられた歴史」と題された連載物の一遍としてであった。その後、この物語はそのままの形で、エジプト作家協会のシルバー文庫のなかで、「ナイルのほとりにて」というタイトルの物語集のひとつとして、そして再々度、ヒラール文庫のなかで、「砂漠の自由」というタイトルの物語集のひとつとして出版された。

一般に公開されているものであれ、政府機関に付属しているものであれ、エジプトの図書館には、大量な文献と文書が所蔵されており、そのなかには、オマル・マスリーの革命に関する、文字通りの情報が含まれている。

ムスタファー・バアユーは、先に引用したかれの本のなか（一六五頁）で、マリによって英語で書かれた著作『イシュマルの子供たち　エジプトの遊牧民研究』に言及しているが、そのなかでは、エジプトにおけるリビア諸部族とオマル・マスリーの革命が語られている。

3―2　「革命」論文注釈

作品の学術的な価値は、その体裁によってではなく、内容によって定まることは言うまでもない。しかし、ギルド的な専門家集団に受け入れられるためには、その集団において共有されている体裁を取らねばならないこともまた厳然たる事実である。この点、マスリー・キーラーニーの「革命」論文は、注を積極的に使おうとしていることひとつを取り上げてみても、学術論文の体裁をとろうとしていることは疑いない。

私は、会見を繰り返すなかで、マスリー・キーラーニーの性格と資質に対する信頼を深め、かれの「革命」論文を高く評価し、それが立派な学術論文であると判断した。つまり、私はこの論文について、内容の信憑性に疑いを抱いていない。たしかに、会見において、大げさに言えば、文章の一行一行について、その典拠を問う作業を行った。しかし、それは、内容を疑ったからではなく、そのような質問をすることによって、かれから論文の内容以上の情報を引き出せると思ったからである。

わたしは「革命」論文を一読して、二つの点において、もっとも注意を引かれた。第一は、この論文の組み立てであり、第二は、そこで引用されている慣習や詩歌の典拠である。第一の点は、「革命」論文と「革命」物語、つまりハビーブ・ジャマーティーの「オマル・マスリーとマグリブ帽」（加藤 1997b:121-127）の組み立てが類似しているということである。さらに、私を当惑させたのは、一部の文章が両者において、まったく同じであることであった。たとえば、「革命」論文には、次のようなオマル・マスリーの言葉が引用されている。

われわれは盗賊ではなかった。われわれは悪漢ではなかった。われわれは抑圧者ではなかった。しかしながら、悪意をもつ仲介者がいた。かれらは陰謀をめぐらし、われわれを、われわれの高貴さを守るための不幸な戦いに引き込んだ。われわれは、いかなる環境、時、状況にあっても、アラブの精神（'urūba）に仕え、それを高める鋭い刃であり、正義の槍であった。そして、そのために、われわれはエジプト人の兄弟たちと協力した。

これに対して、「革命」物語では、同じくオマル・マスリーの言葉として、次のような文章が載っている（加藤1997b:127）。

われわれは盗賊ではなかった。われわれは悪漢ではなかった。われわれは抑圧者ではなかった。しかしながら、悪意の仲介者が統治者とわれわれとの間に不和の種をまいた。われわれは、いかなる環境、時、状況にあっても、エジプトに仕え、エジプトを高め、エジプトの玉座の柱を支える鋭い刃であり、正義の槍であった。

この二つの文章は、二つの点を除いて、まったく同じである。ひとつは、「革命」論文は「革命」物語よりも、蜂起の理由を詳しく説明していること、もうひとつは、オマル・マスリーが忠誠を誓い、仕える対象が、「革命」論文においてはアラブであるのに対して、「革命」物語ではエジプトだということである。後者は、論文と物語の著者の問題関心の微妙な違いを示していて、興味深い。また、「革命」論文におけるアラブ性の強調は、この論文が当初、

リビアにおいて、「エジプトにおけるリビア諸部族の革命」と題されて執筆されたこととも関係しているであろう。

もっとも、マスリー・キーラーニーは、以上の論述の組み立てと一部の文章が類似していることについて、論文の注で説明している。つまり、かれは、原注12で、「オマル・マスリーとマグリブ帽」の執筆が準備される段階において、ハビーブ・ジャマーティーに協力したと指摘している。しかし、「準備段階での協力」という表現は、曖昧である。そのため、一読する限り、「革命」論文の執筆者による「革命」物語の「剽窃」が疑われても仕方がないように思われる。

実際、私も、最初に論文を読んだときには、この思いが頭をよぎった。しかし、これは、「革命」物語の執筆経緯を知らないことからくる邪推であり、マスリー・キーラーニーと会話を交わすなかで、この邪推は、少なくとも私のなかでは、解消することになる。というのも、かれの説明によれば、すでに指摘したように（加藤 1997b:128）、「革命」の存在を物語の作者ハビーブ・ジャマーティーに教えたのは、ほかならぬマスリー・キーラーニー本人だったからである。

マスリー・キーラーニーはハビーブ・ジャマーティーを尊敬していた。しかし、かれにしてみれば、ハビーブ・ジャマーティーはかれが提供した情報を使って物語を書いたのだし、たとえそこに新たな知見が加えられたとしても、書かれたものは、結局のところ、文学作品でしかないとの思いがある。それに対して、自分が執筆したものは文献資料に基づく学術論文である、との自負があったに違いない。

もっとも、「革命」物語の文章を引用するならば、注において「革命」物語に言及すべきであろう。しかし、少なくとも私は、「革命」物語の執筆経緯を知った後は、文章を注釈なしでそのまま引用するエジプト人の習慣と、マス

リー・キーラーニーの真摯な性格を考慮して、文章の引用を「剽窃」とは考えず、それをことさらとがめたて、かれの「革命」論文の価値を貶めようとは思わなかった。

さて、第二に、私が注意を引かれたのは、「革命」論文に引用されている慣習、逸話、詩歌である。私は、これらの出所について、多くの時間を割いて、マスリー・キーラーニーに問いただした。というのも、そのほとんどについて、注において、典拠が示されていなかったからである。

しかし、正確には、私がかれに質問を繰り返したのは、出所を問いただすためではなく、質問をすることによって、慣習、逸話、詩歌に関するもっと多くの情報を、マスリー・キーラーニーから引き出したいと思ったからである。それほど、それらは生彩ある内容をもち、興味尽きない。たとえば、次のような、オマル・マスリー軍の逃避行に関連して、一般民衆をあやめてはならないというアラブの慣習を指摘した文章である。

1. 身を守るため以外には、エジプト民衆を襲ってはならない。
2. いかなる事情といえども、エジプト人の老人、身体障害者、女、子供と敵対してはならない。
3. 同胞たち（qawm）のリビアへの旅を助けるために限られた頭数の馬、ラクダを捕獲することは許されるが、それ以外に、エジプト民衆の資産を破壊したり、かれらの財産を略奪してはならない。

「革命」論文では、このようなわれわれの心を魅了する文章がちりばめられている。というか、慣習、逸話、詩歌の引用をつなげて出来上がったのが、「革命」論文である。したがって、もし引用が「作り話」であったのなら、「革

命」論文は学術論文ではなく、もうひとつ「革命」物語が作られただけである。

かくて、私は、会見において、細かくこれらの引用の典拠を訊ねることになった。それに対するマスリー・キーラーニーの答えは、容易に想像されるように、「父から聞いた」「叔父からから聞いた」「リビアで収集した」であった。この答えに対して、われわれが成しえることといえば、情報提供者を信じ、それを「事実」として認めるか、情報提供者を疑い、それを「物語」として受け入れるかのふたつである。そして、私はといえば、マスリー・キーラーニーを信じ、私に与えてくれた情報を「事実」として認める。

むすびにかえて

本稿は、マスリー・キーラーニーの急逝に接して、かれへの哀悼の意をこめて、急遽、取りまとめたものである。本稿を書くことによって、私の執筆になる「革命」関係の論文は七本になった。

しかし、それらはすべて、いわば「革命」の外堀を埋める作業であって、いまだ「革命」の全貌はみえてこない。「革命」の全貌を知るためには、外堀を埋めた後、本丸に攻め入らなければならない。私にとって、それは残された関連文書を解読する作業である。

しかし、だからといって、文書の解読抜きには、歴史研究が成り立たないなどといっているのではない。そもそも、「事実」とは何か、「歴史叙述」とは何か、残された「歴史」とは何か、を問い続ける作業が、「革命」研究であった。「革命」をめぐっては、さまざまな立場からの発言があり、それらの発言がさまざまに織り成す社会関係、人間関係

のなかに、「事実」としての「革命」が見え隠れしている。文書は、あくまでも、かかる多様な関係性を読み解く、重要ではあるが、しかし数多くある歴史研究の資料のひとつでしかない。

しかしそれでも、文書解読を「本丸に攻め入ること」と表現したのは、歴史叙述における「活字媒体」の重要性を認識するからである。すでに指摘したように（加藤 1997b: 128-29）、「革命」の存在を語り継ごうとしているものは、間違いなくハビーブ・ジャマーティーの「革命」物語を意識している。ところが、「革命」物語は文学作品でしかない。しかし、文学作品も、ひとたび活字となり、それが人口に膾炙するようになるや、一人歩きして、歴史叙述の典拠となる。

おそらく、今後、「革命」が語られるときには、その文学作品としての性格は忘れ去られ、それが活字として人口に膾炙しているという理由から、「革命」物語が最も重要な典拠として言及されることになろう。実際、「革命」物語の文学性を取り除き、学術論文として執筆されたマスリー・キーラーニーの「革命」論文も、「革命」物語と類似の組み立てをもち、「革命」物語の文章をそのまま引用せざるをえなかった。

私が文書に重要性を付与するのは、ひとえに、その「活字媒体」としての影響力のためであり、そして、とりわけ未刊行文書に興味を持つのは、逆説的ではあるが、それがいまだ世間の目にさらされず、われわれが生きる今日において、「活字媒体」として機能していないからである。まだ少し、外堀を埋める作業を続けなければならないが、これから、出来る限り時間を見つけて、長らく遠ざかっていた「判じ物」解読の迷路に踏み入ってみたい。

1　私はこの蜂起について、これまでに、参考文献に挙げた六本の論文を書いた。そのなかで、（加藤 1997b）以降の論文にお

いて、この蜂起を「革命」と呼んでいる。その経緯については、同論文を参照のこと。

2　マスリー・キーラーニーは、後に述べるように、二〇〇六年の一一月に亡くなった。ささやかながら、この論文を氏への思い出に捧げる。

3　「革命」関連の聞き取り調査は、私が日本学術振興会カイロ研究連絡センターに赴任した一九九三年四月から一九九四年三月までの間に、集中的に行われた。この間、三七回の聞き取り調査が行われたが、そのうち、マスリー・キーラーニーとの会見は、次の二〇回である。一九九三年七月一日、七月一二日、八月一日、八月一〇日、九月八日、一二月一九日、一二月二六日、一九九四年一月三日、一月八日、一月一六日、一月二四日、一月三一日、二月七日、二月一三日、二月二〇日、二月二七日、三月六日、三月一六日、三月一九日、三月一九日。

4　ハーリド・アブデルカウィーとの「オマルの館」における五回の会見は、次の通り。一九九一年九月一六日、九月一七日、一九九三年七月一一日、八月一二日、一一月九日。

5　マスリー・キーラーニーは、「革命」論文の原註（12）で指摘されているように、エジプト公文書館に通って、一八一八年から一八七七年までに作成された、三三二の数にも上る「革命」関係の文書を確認し、それらを作成日付、文書の種類、文書番号、文書内容ごとに整理し、一覧表を作っていた。実にすばらしい文書目録である。しかし、残念なことに、文書の内容を紹介している文章は、一〇語前後の簡単なものにとどまっている。私自身も、マスリー・キーラーニーの作業とはまったく別個に、「革命」関係文書を収集した。その多くは文書自体のコピーである。文書の解読によって、「革命」の詳細を明らかにしたいと考えたからである。こうした、私が収集した文書群とマスリー・キーラーニーが作成した文書一覧表との突合せについては、稿を改めて紹介したい。

参考文献

加藤博　一九八九「国民軍の編成と遊牧民反乱―エジプト近代史における陰画としての遊牧民」『地中海論集　XII』一橋大学地中海研究会編

Kato, Hiroshi 1990 “Nomads and Farmers in the Process of the Modernization of Egypt”, *Orient*, vol.XXVI

加藤博　一九九三「近代エジプトの遊牧民―「オマル・マスリーの反乱」聞き取り調査ノート」『一橋論叢』一一〇巻四号

加藤博　一九九七ａ「遊牧民　Minority or Vagabond？―近代エジプトにおける国家と遊牧民」『上智アジア学』一四号、上智大学アジア文化研究所

加藤博　一九九七ｂ「砂漠に消えた「革命」―近代エジプトの遊牧民「革命」」『地域研究論集』一号、国立民族学博物館・地域研究企画交流センター

Kato, Hiroshi 2001 “The Bedouin in Egyptian National Identity: Minority or Vagabond?”, Usuki Akira (ed.) *State Formation and Ethnic Relations in the Middle East*, JCAS Symposium Series 5, Japan Center for Area Studies (JCAS), Nationl Museum of Ethnology, Osaka, Japan

付録「オマルの館」

(1)　バハル・ユーセフ

(2)　「オマルの館」の玄関

(3)　「オマルの館」の前の風景

(4)　「オマルの館」の後ろの砂漠

(5)　「オマルの館」の見取り図

(6)「オマルの館」の中庭
(7)「オマルの館」のバルコニー
(8)「オマルの館」の応接間
(9)「オマルの館」の寝室
(10)「オマルの館」のホール
(11)「オマルの館」の壁の装飾
(12)「オマルの館」のモスク
(13)「オマルの館」の墓地

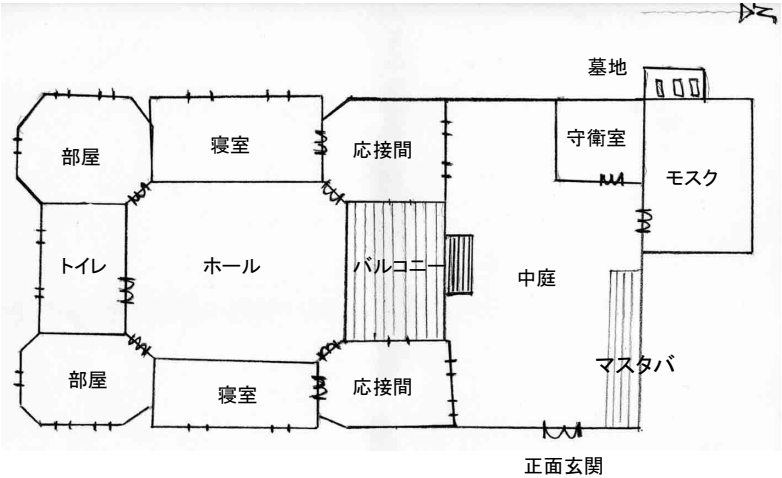
＊なお、写真はすべて、加藤博が撮影したものである。

(1)　バハル・ユーセフ（1991年撮影）
西部（リビア）砂漠の遊牧民にとって、バハル（川）とは、ナイルではなく、バハル・ユーセフのことであった。

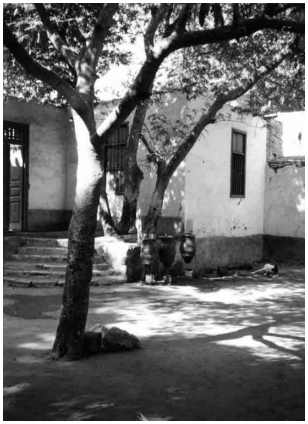
(2)　「オマルの館」の玄関（1991年撮影）
「オマルの館」という表札がある。

⑶ **「オマルの館」の前の風景**（1991年撮影）
運河では家禽、道路では駱駝、羊が行きかう。

⑷ **「オマルの館」の後ろの砂漠**（1993年撮影）
すぐ近くに、西部（リビア）砂漠が見える。



⑸ 「オマルの館」の見取り図
ターハー・キーラーニー作成



⑹ 「オマルの館」の中庭（1991年撮影）
左は守衛所、右はマスタバ（外の居間）。

(7)「オマルの館」のバルコニー（1991年撮影）
階段を上ったバルコニーの正面がホール、左が応接室。バルコニーはシャムカと呼ばれ、太陽が直接当たるため、冬には応接間となった。

(8)「オマルの館」のホール（1991年撮影）
ランプがつるされている(左)。1991年当時、まだ電気が入っていなかった。

⑼ 「オマルの館」の壁の装飾（1991年撮影）
スイカにナイフが立っている絵は、「力」の象徴。

⑽ 「オマルの館」の応接間（1991年撮影）
応接室の外と内。サヌーシー軍も、ここで憩ったという。

⑾ **「オマルの館」のモスク**（1993年撮影）
メッカの方向を示すくぼみ（ミフラーブ）と説教台（ミンバル）。

⑿ **「オマルの館」の寝室**（1991年撮影）
立派な金の装飾の付いたベッド。

⒀ **「オマルの館」の墓地**（左1991年撮影、右2006年撮影）
中央がオマル・マスリーの墓。その左右が、息子アリー（右）、キーラーニー（左）の墓。頭はキブラ（メッカの方角）に向けられている。1991年時点では、墓に土が盛られず、頭部の箇所に石が置かれているだけだった。